

洛和会京都看護学校 学校評価 令和7年度自己評価結果

本校が取り組んだ令和7年度の学校運営を振り返り、点検・評価した自己評価結果を以下に取りまとめる。

令和7年度においては、校舎新築移転により学生が能動的に学習できる環境が飛躍的に向上することから、「教育環境の充実・発展」、また多様化する退学理由をふまえ、学生の心の健康管理にも配慮した相談体制の構築などを含めた「学生支援の強化」を重点的に展開することとした。

なお、学校評価に際し年度末に学生アンケート、教員アンケートを実施し、経年変化を調べるとともに、双方の意識の乖離を測ることとしている。看護学科の回収率は92.4%(前年度80.6%)、助産学科の回収率は65.0%(前年度85.0%)、教員の回収率は72.2%(前年度87.5%)であった。

1 基礎データ (令和7年度)

(1) 学生数 ※令和7年4月1日時点

看護学科1年 (定員80名)	看護学科2年 (定員80名)	看護学科3年 (定員80名)	助産学科1年 (定員20名)	合計 (定員260名)
91名	80名	82名	20名	273名

(2) 国家試験合格者数 ※新卒者

区分	受験者数	合格者数	合格率
看護学科	78名	73名	93.6%
助産学科	20名	20名	100%

(3) 就職率 ※就職希望者の就職率

看護学科	100%
助産学科	100%

2 評価項目

(1) 教育理念・教育目的について

本校の教育理念は、「洛和会ヘルスケアシステムの理念(*1)を基盤とし、生命の尊厳と人権を尊重する倫理観を持った助産師・看護師の育成を目指す。」及び「豊かな人間性と看護に必要な態度、知識、技術を持った地域医療に貢献できる医療人の育成を目指す。」の2点である。

また、教育目的には「人間を総合的に理解し、人間愛と人権意識に根差した、対象から信頼される専門的パートナーシップを備えた医療人を育成する。」「専門職として必要な知識及び技術を身につけ多様な対象の個別性に対応できるよう、知識を自ら探求し、解決していく医療人を育成する。」と定めている。

(*1 洛和会ヘルスケアシステムの理念とは「一 顧客第一に質の高い医療、介護、保育を提供します」「一 すべてのサービスに誇りと責任を持ちます」「一 経営基盤を確立し、個人と組織の向上を目指します」の3点である。)

教育理念、教育目的について学生の理解度と教員の周知・浸透に係る自己到達度を問うたところ、「理念」については看護学科・助産学科の学生どちらも前年度より「かなり(理解)できた」「ある程度(理解)できた」の割合が上昇し、理念が浸透していることが窺える。また、教員の回答では、昨年度14.3%あった「全く(周知・浸透)できなかった」が0%に減り、「あま

り（周知・浸透）させられなかった」の回答が増えた。教員からは「意識はしたが浸透には至っていない」「周知・浸透させる機会や時間が少ない」「伝え方が難しい」等の意見があり、充分ではないものの、周知しようという意識の改善がみられた。

また「目的」については、看護学科の学生は「ある程度（理解）できた」が79.1%と前年度より12.1ポイント高くなり、助産学科の学生は「かなり（理解）できた」が前年度より17.2ポイント上昇して23.1%となるなど、大幅に理解度が増している。教員側も「ある程度（周知・浸透）させられた」が84.6%と前年度より13.2ポイント高く、教育目的については相互理解が深まっていることが窺える。

しかしながら、学生のなかには「理念・目的を知らない」という意見もあり、教員の到達度も低かったことから、次年度に向けては、教員が余裕をもって教育理念や教育目的を指導できる機会を確保できる体制を整備し、さらに周知・浸透させていく必要がある。学生に対しては、引き続き本校の教育理念、教育目的、さらには教育目標や3つのポリシー（ディプロマポリシー、カリキュラムポリシー、アドミSSIONポリシー）を周知・浸透させられるよう工夫を続けるとともに、募集段階から学生にしっかり理解・認識してもらえよう、各種広報資料等でも広めていく必要がある。

（2）学校運営について

令和7年度においては、学校長1名、学科長2名、副学科長1名及び専任教員14名と実習指導教員3名、さらに教務事務というカテゴリをなくして管理部職員として統合した13名の事務職員の合計34名体制（令和7年4月1日時点）で学校運営を開始した。令和8年3月には、実習指導教員の増員を図り、次年度にむけた教員組織強化を行った。

また、きめ細かな学校運営を展開するために「運営会議」「学科会議」「カリキュラム会議」「入試判定会議」、さらには「図書委員会」「TQM委員会」など各種委員会や会議を設置し連絡調整、企画運営を進めている。

（3）教育課程・教育活動について

令和7年度の講義概要（シラバス）や教育課程（カリキュラム）が学修・教育活動にどの程度有用であったかについて、学生及び教員にアンケートをとった。

まず、講義概要（シラバス）について、【授業内容を理解しやすく授業に役立ったか】との問いでは、有用であった（「非常にあてはまる」「だいたいあてはまる」）と答えた学生は前年度と比べ看護学科で12.1ポイント高く76.5%、助産学科では9.9ポイント高く92.3%であった。また、教員は19.8ポイント高く76.9%となり、全体を通して講義概要（シラバス）の内容に満足した者が多かった。なお、今年度からシラバスを印刷配布ではなく、デジタル閲覧のみとしたが、そのことによる影響は特に無かったと評価している。

次に、教育課程（カリキュラム）について【段階的に学べるよう工夫されていたか】との問いでは、「非常にあてはまる」「だいたいあてはまる」と答えた者の割合が看護学科の学生は前年度より11.5ポイント上昇し87.4%、助産学科の学生は前年度より15.8ポイント上昇し92.3%、教員は5.0ポイント上昇し69.2%となり、前年度と比べ教育課程（カリキュラム）への満足度が大幅に上昇した。前年度の反省をふまえ、学生の学修理解が深まる工夫と改善を行った結果

であると考えられる。しかしながら、教員の回答では「あまりあてはまらない」と答えた割合が 23.1%となっており、まだまだ改善の余地がある。今回の結果に満足せず、さらに充実した教育課程（カリキュラム）を提供できるよう学科全体で取り組んでいく必要がある。

また、【学修・実習の躓きにどう対処したか】を複数回答で問うたところ、例年通り「級友に聞く」が最も多く（看護学科で 67.4%、助産学科で 92.3%）、ピアサポート的な良さが見られる一方、「教員・指導者に聞く」を選択した者も前年度より上昇し看護学科で 51.7%（前年度 45.5%）、助産学科で 53.8%（前年度 41.2%）となった。要因としては、新校舎になって教務員室への出入りがしやすくなったことで、以前よりも教員に質問等をしやすい環境ができたことが挙げられる。学修への正しい理解を深めてもらうためにも、設備面だけでなく教員が学生と関わる時間を増やせるよう調整するなど、さらに教員に声をかけやすい環境を整えていく工夫が必要である。

（４）学修の到達度について

令和 7 年度における本校の国家試験の合格率は、看護学科 93.6%、助産学科 100%であった。夏頃からは 21 時まで学校を開放して教員や卒業生から勉強を教えてもらうなど学修環境の整備を行ったが、残念ながら看護学科は 100%を達成できなかった。次年度は、両学科ともに 100%を達成できるよう、定期的な模擬試験の実施と結果の分析、ひとりひとりのレベルに合った過去問題や資料の提供、教員や卒業生による学習サポート体制をさらに強化するなどあらゆる面から学生をバックアップしていく。

1、2 年生においても、ICT を使った特別講義や新校舎移転により新たに導入した情報機器を活用し、学修理解を深められるよう工夫した。また、令和 7 年度から 1 年次に基礎学力テストを試験的に実施した。翌年度は、この基礎学力テストの成績をもとに、学生の学力や苦手分野にあわせた科目を選択し受講することで、発展的な科目での躓きを無くすことに役立てることとする。教員側も、基礎学力レベルを把握できたことによってひとりひとりに合わせて指導の仕方を工夫できるという大きなメリットがあった。今後も毎年度実施し、早いうちから学修の躓きに対し適切に対応するための資料として活用していく。

さらに、入学前の学生（合格者）に対して、入学前教育プログラムへの申し込みを強く推奨し、学力を維持・向上した状態で入学してもらえるようにした。今年度は、合格者の所属する高等学校に本プログラムの情報を共有し、合格者に対して受講するよう指導を依頼した結果、入学者のうち約 67%が受講した（令和 6 年度の受講者 53 名、令和 7 年度の受講者 58 名）。次年度も、現役生だけでなく社会人も含めてさらに多くの合格者に受講してもらえるよう促していく。

【この学校を選択したことの満足度】においては、「大変満足」「概ね満足」と答えた学生が看護学科で 90.4%（前年度 75.9%）、助産学科で 92.3%（前年度 100%）となり、特に看護学科では大幅に上昇した。新しい校舎になって間もないためさまざまな面で改善点はあるものの、学生にとっては概ね満足感を得られる 1 年間であったことは良かった点として受けとめたい。

一方で、学生の退学率は、看護学科の 1 年生が 4.4%、2 年生が 6.3%、3 年生が 2.4%、助産学科の学生の退学率は 0%であった。前年度比では、1 年生で 2.6 ポイント減、2 年生で 2.8 ポイント増、3 年生で 1.4 ポイント減となった。退学者は前年度より 1 名減ったものの、例年通り

進路変更を理由とした退学が多く見受けられ、今年度も 11 名の退学者があった。今後は、洛和会のメンタルサポート室との連携を含めた退学防止対策及びチューター制等による学生の心理面のサポートをさらに充実させていくと同時に、入学時に看護職を進路として選択する意識の再確認を徹底することも効果的であると考えられる。

(5) 奨学金など学生への支援状況について

本校では令和 4 年度に「大学等における高等教育の修学支援新制度」の確認申請を行い、令和 5 年度から対象校に認定されたところである。この制度を利用した学生は、令和 6 年度 32 名であったが、令和 7 年度は多子世帯への支援拡充（多子世帯の者は満額まで授業料減免を受けることが可能）に伴い 53 名（停止中の者 3 名は含まない）と急増した。

また、医療法人社団洛和会が貸与する「洛和会奨学金」（返還免除の規定あり）や社会人入学者支援のための「社会人生活応援貸付金」、また学校法人洛和学園による「特待生報奨金」（給付）などを整備しており、最も利用者の多い洛和会奨学金は令和 7 年度末（令和 8 年 3 月 31 日）時点で、看護学科学生 242 名中 191 名が利用し、78.9%を占めた。令和 6 年度からは、さらに利用されやすいように保証会社（機関保証）が導入され、約 34%の学生が利用した。洛和会奨学金の貸与制度は、今後も洛和会ヘルスケアシステムの看護師確保対策の一助となるよう推進する。一方で、学校法人という公共性から、看護師確保に苦慮する医療機関への看護師輩出も拡充する必要がある。今後は、他病院の奨学金等も含め合格者への案内方法を検討していくこととしている。

そのほか、京都府をはじめとした行政の修学支援、日本学生支援機構の貸与型奨学金、専門実践教育訓練給付制度での教育訓練給付金・教育訓練支援給付金なども引き続き活用し、金銭面の負担を軽減して学業に専念できる環境を整える。

(6) 教育資材・教育環境の整備について

【魅力を感じる本校の特色は】という問いに対して「設備・教材教具」「ICT 環境」「施設」といったハード面について魅力を感じたと回答した学生が看護学科で 78.2%（複数回答）、助産学科で 138.5%（複数回答）となり、前年度より看護学科で 46.7 ポイント上昇、助産学科で 115 ポイント上昇した。新校舎移転に伴って、自習スペースを完備した図書室、広い実習室やシミュレーションルーム、最新の ICT 技術や情報機器の整備により教育環境が飛躍的に向上したことが高く評価された。

また「教員・講師陣」が魅力と回答した学生は看護学科で 21.3%と前年度より 8.2 ポイント上昇、助産学科では 30.8%で 13.2 ポイント上昇し、教員（講師）に対する評価が向上していることがわかった。

一方で、スクールガイドやオープンキャンパス等でも本校の大きな特色として紹介している「チューター制・タテ割りクラス」が魅力であると回答した学生の割合は減少傾向にあるが、教員については多くの者が魅力であると回答しており、認識に乖離がある。学生からは「もっとサポートしてもらえと思っていた」との意見があり、新校舎になって学修環境は整備されたものの、その他の面ではまだまだ満足が得られておらず改善点や課題が残ったといえる。こうした状況をふまえ、ハード面だけでなくソフト面も含め、学生に寄り添ったきめ細かな指導・

教育を提供し、質の向上に努める必要がある。

(7) 入学志願者増の取組について

オープンキャンパスについては、看護学科は4月～10月にかけて合計6回開催した。特に参加者数を多く見込んだ4月、5月、6月は午後2時からと午後6時からの二部制とし、社会人でも来校しやすいように設定した。今年度は新校舎へ移転した直後ということもあり、参加者数は合計355名となり、前年度の255名から100名増加した。

助産学科は6月と8月の2回開催し、8月は午後2時からと午後6時からの二部制とした。前年度までは遠方の方向けにオンラインでも同時開催していたが、近くに住んでいてもオンラインに流れてしまった反省と、新校舎を実際に見てもらってアピールしたい狙いから、今年度はオンライン開催を行わなかった。結果、合計200名が参加し、前年度の147名から53名増加した。

同伴者を除いた当事者ベースでは看護学科で前年比+139%、助産学科で前年比+136%であった。

また、都合が合わずオープンキャンパスに参加できない方のため、今年度は「平日学校見学会」として平日の夕方より学校説明会、キャンパスツアー、個別相談を組み込んだプログラムを設定し、オープンキャンパスの代わりとなるイベントとして実施した。AO入試および社会人入試の出願には、オープンキャンパスや平日学校見学会、個別相談会への参加を必須条件としたこともあり、平日学校見学会は合計51名、個別相談会は11名の参加があった。

今年度から高校訪問の専任職員を配置したことにより、きめ細かな高校訪問を実施したことも大きな成果をあげたと評価している。また、高校内ガイダンスや会場型進路相談会、高等学校と連携した出前授業、鳥取城北高校の生徒を招いた学校見学会の実施、高校の進路指導担当教員を対象とした学校説明会等の広報活動を積極的に展開した。

以上の取組を経て、令和8年度募集入試において看護学科では定員80名に対して267名の志願者（うち259名受験）で前年度の113名志願（うち109名受験）より154名の志願者増加、150名の受験者増加となり、86名が入学した。助産学科では定員20名に対して120名の志願者（うち109名受験）となり、前年度の114名志願（うち96名受験）より6名の志願者増加、13名の受験者増加となり、21名が入学した。

看護系専門学校においては、少子化等の影響で、いずれの学校も学生募集に苦戦する中、本校は今日まで一度も定員割れを起こすことなく推移している。新校舎への移転を追い風に、各種SNSや広告をうまく活用しながら引き続き本校の魅力を最大限発信し、他校との差別化を図り、教職員一丸となって「選ばれる学校」へとさらに歩みをすすめたい。

(8) 特別活動について

卒業前の研修旅行は、令和7年度も引き続き実施した。研修地は昨年度同様韓国とし、74名が参加した。

また、学生自治会を発足し、水脈祭（学校祭）を学生が主体となって運営し、盛況であった。

毎年、東部文化会館にて行うキャンドルセレモニー（看護への誓い）は父母のみならず指定校の進路指導担当者にも通知を行い、現役高校生の見学も募った。このほか、消防訓練、交通

安全教室、20歳の誓い、ホームカミングデー、父母会等の各種行事やイベントを催した。

(9) 地域・社会への貢献、他機関との連携状況について

本校の母体病院である音羽病院は、地域医療の中核を担う総合病院として地域とのかかわりを重視してきた。本校のスタッフも保育所での手洗い指導などを従来から行っており、今年度も助産学科の学生が地域の児童館と協同して中高生世代と赤ちゃんとの交流活動を開催し、妊婦体験や産道体験、命の授業を実施した。

また、地域包括支援センターと協働し近隣のショッピングセンターで認知症啓発イベントを開催し、看護学科の学生が参加した。

このほか、実習先である就労支援施設で作られたパンの校内販売、障害者支援施設で製作されたアクセサリ等の販売支援、NPO 法人が取り組むフードドライブへの協力を行った。

今後も地域の諸機関との連携により、相互に協調・協働して看護にかかわる専門学校ならではの取組みを引き続き発信していくこととする。

本評価結果についてはホームページ若しくは刊行物等により公表するとともに「学校関係者評価」を実施し、さらなる点検・改善を図るものである。

(参考)

校内評価委員会

洛和会京都看護学校学校長、看護学科長、助産学科長、看護学科副学科長、管理部長